知名町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）

前　当　遺　跡

1988年3月

鹿児島県大島郡知名町教育委員会

序　　文

本報告書は，知名町教育委員会が，土地基盤整備地区（第四知名東部地区）に存在する上平川前当遺跡の発掘調査を記録したものです。

前当遺跡は，昭和61年度に，町が遺跡の分布調査を行った際に発見されたもので，その後の確認調査で柱穴と溝状遺構を確認しました。

発掘調査の結果，中世時代の鉄滓，フイゴの羽口，磁器等が発見された。耕作により，包含層が攪乱されており，また，鉄滓を含んだ焼土に時代を決定する遺物がないため，時代を明確にすることはできませんでした。

発掘作業後，記録や遺物の整理が進み，ここにその報告書を発行する運びとなりました郷土史の研究，文化財の保護及び愛護思想の普及に，この報告書が活用して頂ければ幸いに存じます。

終わりに，この発掘調査にご尽力して頂きました県教育庁文化課並びに地元の方々に厚く感謝申し上げます。

昭和６３年３月

知名町教育委員会

教育長　山　下　　透

例　　言

1．本報告書は，知名町教育委員会が，鹿児島県農政部（県農地整備課）からの受託事業として実施した県営畑地帯総合土地改良事業（第四知名東部）に伴う発掘調査報告書である。

2．調査は知名町教育委員会が調査主体者となり発掘調査は県教育庁文化課が担当した。

3．本書の執筆，編集は戸崎勝洋，東和幸が担当した。

4．本書に用いたレベル数値は，すべて海抜高である。

本　文　目　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　調査の経過 …… 4
　第１節　調査に至るまでの経過 … 4
　第２節　調査の組織 …… 4
　第３節　調査の経過 …… 4
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 8
第Ⅲ章　発掘調査 …… 16
　第１節　調査概要 …… 16
　第２節　土　層 …… 16
第Ⅳ章　遺　構 …… 17
　第１節　溝状遺構 …… 17
　第２節　鍛冶跡 …… 17
第Ⅴ章　遺　物 …… 23
第Ⅵ章　まとめにかえて …… 25
あとがき …… 34

挿　図　目　次

第１図　前当遺跡グリッド配置図 … ５～６
第２図　沖永良部島地質図 …… 8
第３図　前当遺跡及び周辺遺跡 … 11～12
第４図　前当遺跡周辺地形図 …… 15
第５図　土層断面図 …… 16
第６図　溝状遺構 …… 18
第７図　溝状遺構内出土遺物 (1) … 18
第８図　溝状遺構内出土遺物 (2) … 19
第９図　溝状遺構内出土遺物 (3) … 20
第10図　鍛冶跡 …… 21
第11図　鍛冶跡内出土遺物 …… 22
第12図　出土遺物 (1) …… 23
第13図　出土遺物 (2) …… 24

表　目　次

表１　遺跡地名表 …… 9

図　版　目　次

図版１　遺跡近景，土層 …… 27
図版２　溝状遺構，検出後 …… 28
図版３　溝状遺構内出土遺物 …… 29
図版４　溝状遺構内出土遺物，鍛冶跡発掘状況 … 30
図版５　鍛冶跡内出土遺物 …… 31
図版６　出土遺物 …… 32
図版７　発掘風景 …… 33

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部農地整備課（沖永良部土地改良出張所）は，知名町において「県営圃場整備事業（第四知名東部）」を計画，事業実施前に文化財の有無を知名町教育委員会に照会した。

知名町教育委員会は昭和61年11月７日分布調査を実施，土器片12点，類須恵器19点，脚台らしき破片２点を採集，当該地が遺跡であることを確認した。

ところが遺跡を含む当該地は，昭和62年７月工事着工予定にはいっているうえ，作付け等の関係で工期の延長もできない現状であった。

そこで，再度詳細な分布調査を実施し，より詳しい情報を得るため昭和62年３月17日，18日の２日間，鹿児島県教育庁文化課は，知名町教育委員会の依頼を受けてボーリングを含む分布調査を行った。調査の結果，溝状遺構の他，ふいごの羽口等６点を採集した。

この２回の分布調査結果をふまえて各関係機関で取扱いを協議した。協議では，工期や地元の要望も勘案し，とりあえず発掘調査を実施，その結果をもとに再び取扱いについて協議，検討することで合意した。発掘調査に係る経費は，県農政部で負担（農家負担分については町で負担），知名町と委託契約を締結した。

発掘調査は昭和62年８月17日から８月23日まで６日間実施した。

第２節　調査の組織

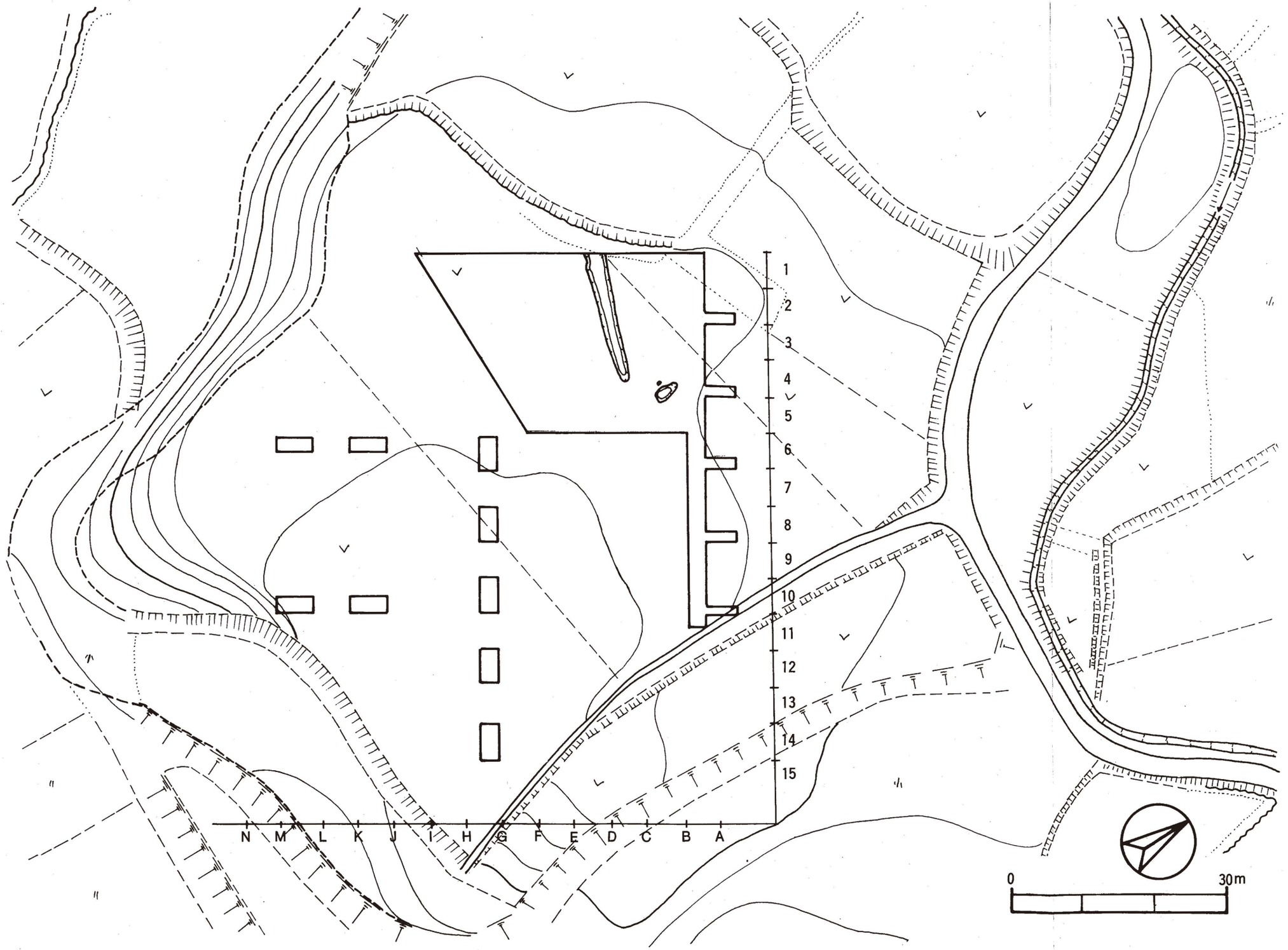
調査主体者	知名町教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	山下　透
		社会教育課長	神川一郎
		社会教育主事	栄　治夫
		主事	森田　明
		〃	新納哲仁
		社会教育指導員	川畑吉雄
調査担当者	鹿児島県教育庁文化課	文化財研究員	戸崎勝洋
		主事	東　和幸

調査企画においては，鹿児島県教育庁文化課長吉井浩一，同補佐川畑栄造，同主幹森田斉，同主任文化財研究員立園多賀生氏等文化課の協力を得た。

発掘調査中は沖永良部土地改良出張所や，町教育委員会の大山倭（前任者）氏には助言や協力を得た。

第３節　調査の経過

発掘調査は，昭和61年11月の分布調査で確認された溝状遺構と，羽口の関連遺構の検出を主眼とする一方，台地全体の確認のために，推定範囲をカバーできるグリッドを設定した。



第１図　前当遺跡グリッド配置図

グリッドの基準線は県営圃場整備事業の第35号支線道路の中心杭とし，10m×10mを1単位とするグリッドを設定し，北～南へ1～15，東～西へA～NとしA－1区等呼称した。

発掘調査は　前回の詳細分布調査時に検出された溝状遺構のE－1区と支線道路建設で削平されるA－B～1～11区を中心に試掘溝を設定し，順次掘り下げた。

また，台地中央部から先端部にかけても都合9本の試掘溝を設定し，遺跡の拡大範囲の確認に努めた。

その結果，各トレンチとも撹乱を受け遺物包含層はすでに削平されていた。ただしC～E－1～4区には遺構が検出されたため，この区を中心に拡張し発掘調査を実施した。

日誌抄

8月17日（月）

知名町着。発掘方法等諸注意及び説明。用具点検。グリッド設定ののちB－6，B－8区掘下げ。表土より近世陶磁器片出土。

8月18日（火）

B－6，B－8，B－10区掘下げ。表土下はすぐマージとなり遺物出土せず。
H－5以西に9カ所のトレンチを設定し，各トレンチの掘下げ。

8月19日（水）

各トレンチとも遺構，遺物は出土せず。A－2，4，6，8，10区をトレンチ掘り。遺構，遺物は出土せず。

8月20日（木）

溝状遺構，鍛冶跡を中心に拡大し，各遺構掘下げ。溝状遺構中から類須恵器片，鍛冶跡からは鉄滓，羽口等出土。溝状遺構内遺物を平板，レベル測量ののち取上げ。

8月21日（金）

各トレンチ土層断面実測。2遺構精査ののち位置図，鍛冶跡実測。鍛冶跡の遺物取上げ。

8月22日（土）

各トレンチ埋戻し作業

8月23日（金）

用具点検，収納

8月23日（日）

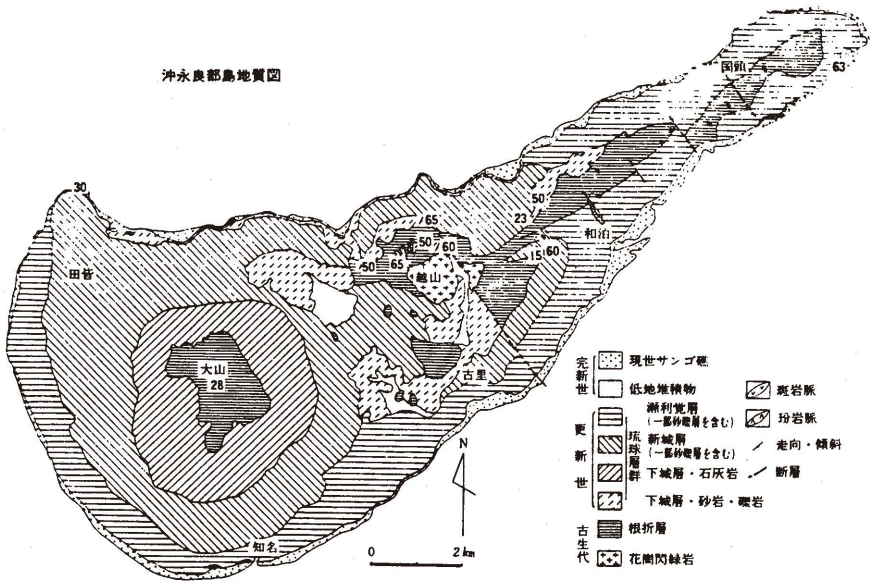
出土遺物発送で調査完了。

発掘風景

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

前当遺跡は，大島郡知名町大字上平川前当219－イ，ロ他に所在する。

遺跡の所在する知名町は，鹿児島から南へ542kmに位置し，東北は和泊町と隣接し，南は太平洋を隔てて与論島や沖縄本島を望み，北は東シナ海に面している。



第２図　沖永良部島地質図

前当遺跡は，この知名町のほぼ中央部の大山の裾部に位置する。

海岸線からは直線で約２km内陸に入り，標高約68～69mを測る台地上に立地する。現在は圃場整備事業が進みみごとな耕作地となっているが，改良前は竿津川の上流の小さな川が台地を開析したために，台地は小さな谷状の低地が入り込み，各台地を分断した地形を呈していた。

本遺跡の立地する台地もこのような台地の１つである。台地は北西より南東から南西に延びた台地で，台地と低地の比高差は約５mを測る。周辺の低地は田や畑に利用されている。

知名町の遺跡が考古学的研究の対象となったのは昭和32年，河口貞徳氏が住吉貝塚を発掘調査したのが始まりである。河口氏はその後昭和57，58年には中甫洞穴を３次に亘って発掘調査された。

また昭和56，57年には鹿児島大学，沖縄国際大学によりスセン當貝塚，神野貝塚の発掘調査が行われた。

昭和60年には県営圃場整備事業に伴って，赤嶺原遺跡の発掘調査。同年には町単独事業として町内の遺跡分布調査も実施された。

昭和62年には熊本大学の手によって石原余多遺跡の調査もあり，次第に町内の遺跡の性格等が解明されつつある。一方町内の遺跡については大山倭氏の日頃の努力により新しい遺跡の発

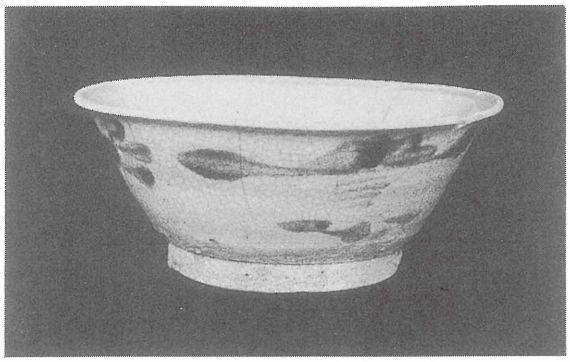
見も相ついでいる。

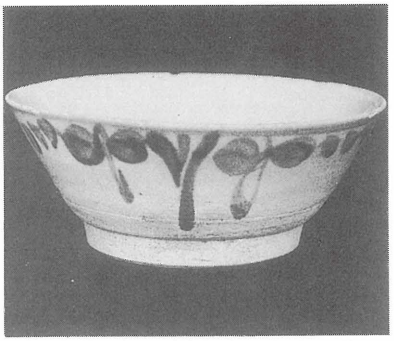
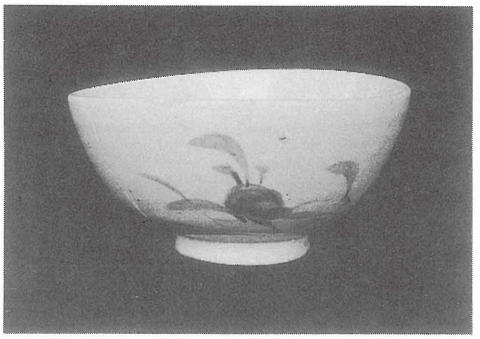
これらの研究成果によると，町内の遺跡は海岸部や段丘縁辺部，あるいは洞穴内という所に立地し，古くは縄文時代早，前期から住みついていたことが判明している。

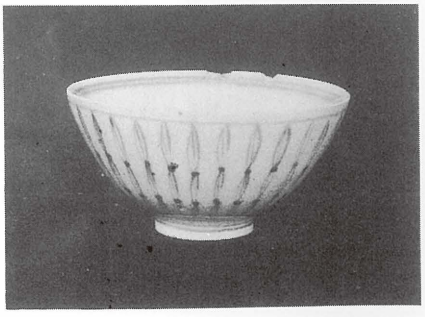
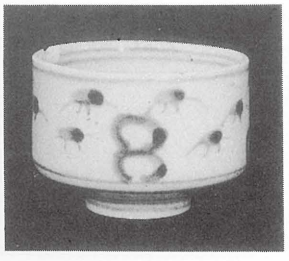
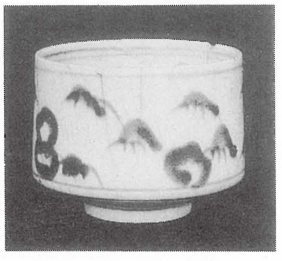
表１　遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等
1	前当遺跡	大字上平川前当	台地		類須恵器，鉄滓
2	中浦洞穴	久志検水窪			
3	赤嶺原遺跡	赤嶺原			
4	石原遺跡	大字余多字石原	丘陵地		土器
5	イクサイヨ洞穴	大字余多字石嘉喜	森林		人骨，土器，貝輪，石斧
6	花城洞穴	大字上平川字花城	〃		
7	芦清良前兼久	大字芦清良字前金久	海岸		土器片
8	塩津類ビ遺跡	大字屋子母字塩津類ビ	道路		
9	泊り原遺跡	大字屋子母字泊り原	〃		土器片
10	川春遺跡	〃　字川春			
11	屋子母遺跡	〃　字植村	丘陵		土器，石器
12	当ノ増遺跡	〃　当ノ増	道路		土器片
13	大津勘フーダトウ遺跡	大字大津勘			
14	大津勘フバド遺跡	〃　字フバド			土器片
15	スセン當貝塚	大字屋子母字スセン當	砂丘	古墳時代相当期	獣骨　貝製品 貝製品，貝匙，螺蓋製貝斧，飾品
16	神野貝塚	大字，大津，勘字，神野	〃		
17	木部蘭迫遺跡	大字，住吉，木部蘭			土器片
18	住吉貝塚	大字，住吉，字金久			土器，石斧，槌石，石皿 牙器，貝製品
19	友留遺跡	〃　友留			
20	手殿遺跡	〃　手殿	畑地		
21	正名内間遺跡	大字正名字内間	〃		土器
22	志良部当遺跡	〃　志良辺当			
23	田皆伊美畑遺跡	大字田皆字伊美畑			磨製石斧
24	アンギム遺跡	大字下城アンギム	畑地		土器片
25	永良部洞穴	瀬利覚スマン辻	森林		土器片
26	上城	字下城字先間他	原野	応永年間頃（？）	礎石

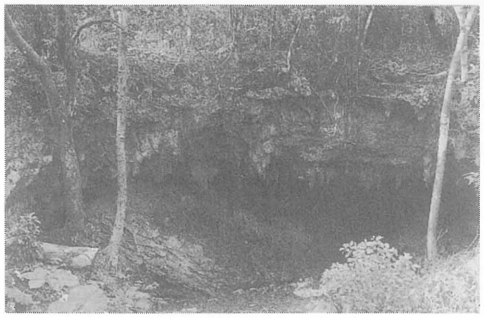
第3図　前当遺跡及び周辺遺跡



トゥール墓出土陶磁器



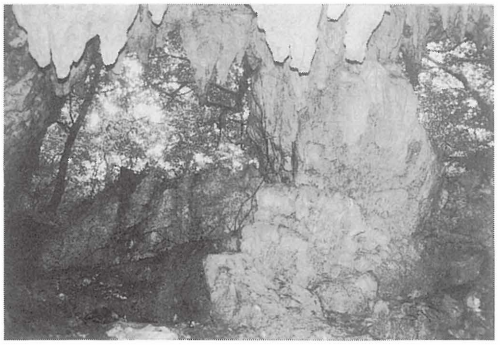
中甫洞穴

神野貝塚

住吉貝塚

石原余多遺跡

スセン當遺跡



花城洞穴

イクサヨー洞穴

第4図　前当遺跡周辺地形図

第Ⅲ章　発掘調査

第1節　調査概要（第1図）

発掘調査は，前回確認された溝状遺構と遺跡の範囲確認を主眼とした。

調査は設定した5×5mのグリッドに沿って幅2～3mのトレンチ掘りとし，A，B区から掘り下げて確認を行った。ついで遺跡の範囲確認のため台地の南西側のH－5～14区，K～N－5，10区にトレンチを設定し，掘り下げた。

調査の結果，溝状遺構は2，3区に延びることが判明したので，B～K－1－5区に調査区域を拡大，南西側の各トレンチからは撹乱を受けた遺物のみが出土しただけであった。

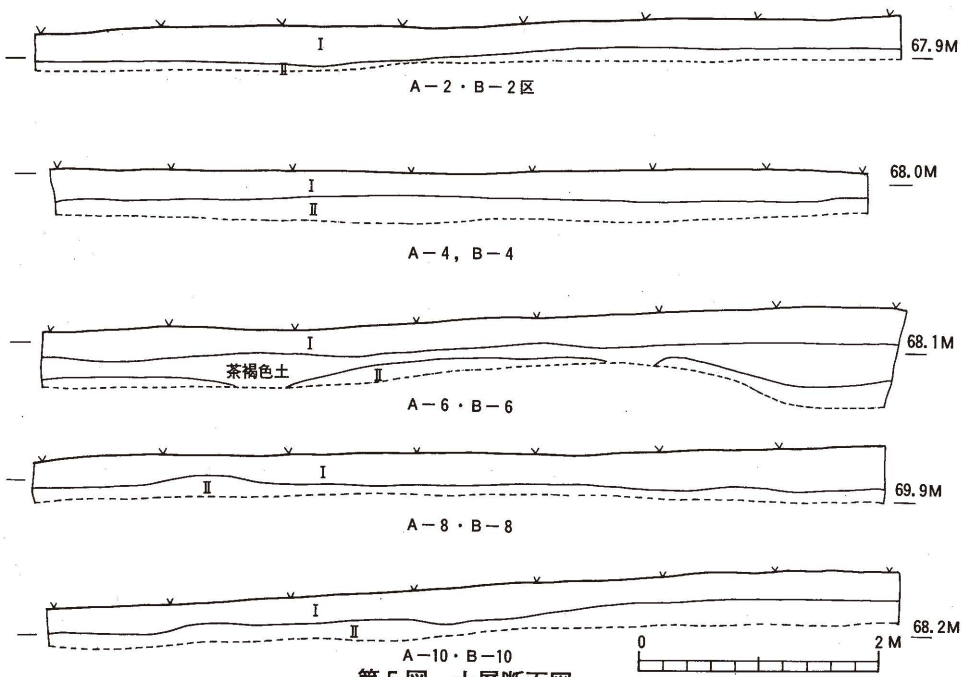
以上の確認調査の結果をふまえ，B～K－1～5区の拡大区を完掘するとともに，溝状遺構及び鍛冶跡の2遺構の検出に努めた。

遺物は類須恵器，羽口，鉄滓，陶器片等であった。

第2節　土　層（第5図，図版1）

土層は，Ⅰ層が明褐色を呈する表土，Ⅱ層が赤褐色粘質土（土地ではマージと呼称する，サンゴの風化土といわれる）である。Ⅰ，Ⅱ層の間には，B－6区等でみられる茶褐色土が1枚はいる所もある。

遺物は撹乱する層のため，表土を主に出土する。溝状遺構及び鍛冶跡は，Ⅱ層上面で確認されたものである。



第5図　土層断面図

第Ⅳ章　遺　　構

第１節　溝状遺構（第７－９図，図版２～４）

溝状遺構は，Ｄ，Ｅ－１～４区に検出されたもので東西に走り検出時の延長は14.6ｍを測り基点部はＤ－４区である。幅は基点付近が0.9ｍで西に走るに従って幅広となり検出時の終末では1.6ｍを測る。深さは両端で0.6ｍの差を測ることから本溝状遺構は東から西への流出を意図したものと思われる。横断面はＵ字形を呈する。溝中に類須恵器片が出土した。

１～15までは類須恵器　16は土器　17は陶器である。１は小型の壺の口縁部である。大きく外反し，口唇部は尖り気味である。口縁部外側は２段の稜がみられる。丁寧なロクロ仕上げである。２は内面格子目のタタキ，外面には１条の横位の沈線の上下に連続する波状文を施す。３は壺形土器の肩，胴部である。外面下部は平行タタキ，上部はタタキ目をナデ消している。肩部には粗雑な波状文を施す。４の外面は縦位のナデ，内面は指頭の後ハケ目で仕上げる。５は胴部片で外面は綾杉状のタタキでタタキ間に重複がみられる。内面は格子状のタタキ後ヘラ状工具により器面調整を行う。６は外面は綾杉状のタタキ目，内面は格子目のタタキを施し，外面はナデ，内面はハケ，外面はナデ調整している。７の内面は赤褐色を呈し平行タタキ目，外面はくすんだ暗灰褐色を呈し綾杉状のタタキ目を施す。８は軟質に焼上ったもので磨耗が著しい。内外面ともナデ仕上げである。９は外面が平行タタキ目ののちナデ消している。内面は粗いナデ調整を行う。17は薩摩焼である。

10～14は底部である。このうち11は底部と胴部下位の接合痕がみられ製作工程を知り得る。

15は復元口径13.5㎝を測る玉縁の埦である。玉縁は小さく先端部で消滅している。内外面とも丁寧なロクロ仕上げで，胴部には波状文を施す。

16は復元底径20.5㎝を測る。口縁部は欠損するが他の同類の破片からみると短かく皿状を呈する。内外面は黒褐色，底面は茶褐色を呈し，胎土は砂粒のほか多量の金雲母を混入する。内外面とも指頭による整形を行っているため凹凸が著しい。底部と胴部接点には焼成後の穿孔がみられる。17は薩摩焼の埦である。

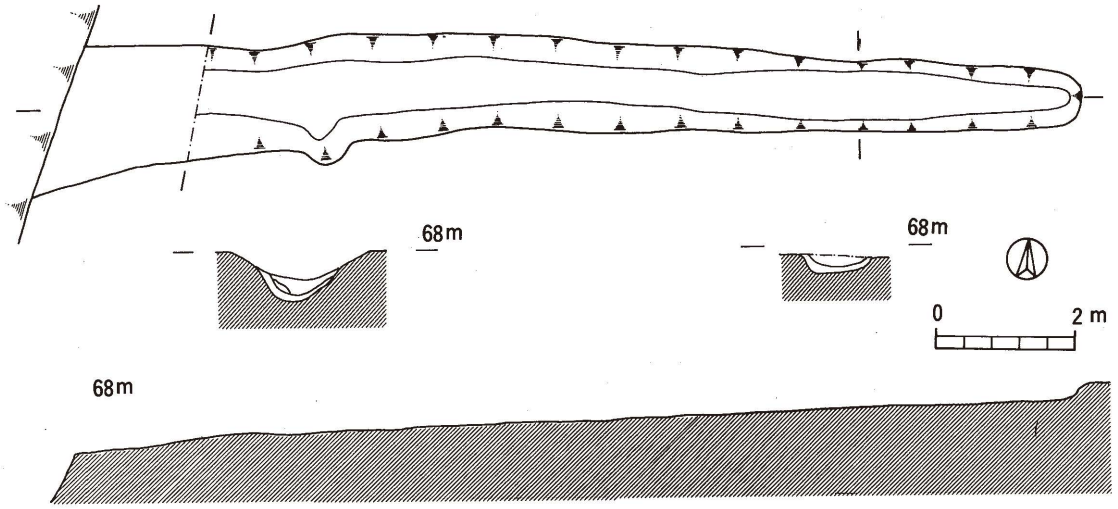
第２節　鍛治跡（第10，11図，図版４，５）

鍛治跡はＣ－４区，溝状遺構の先端の東側約５ｍの位置に検出された。長径2.59ｍ，最大幅径1.16ｍ，深さ0.15ｍを測り，長軸は南北にとる。平面形は隅丸長方形を呈するが，南辺はやや正方形となる。坑内には，羽口，鉄滓とともに木炭が出土した。

18～25までが羽口，26～28までは土器である。

18は外径８㎝，穿径2.4㎝を測る羽口胴部片である。胎土砂粒を多く含み器面はザラザラとしている。19～25までは羽口の端部付近である。いずれも火熱を受け，端部には磁器化を帯びる溶着物が固着している。

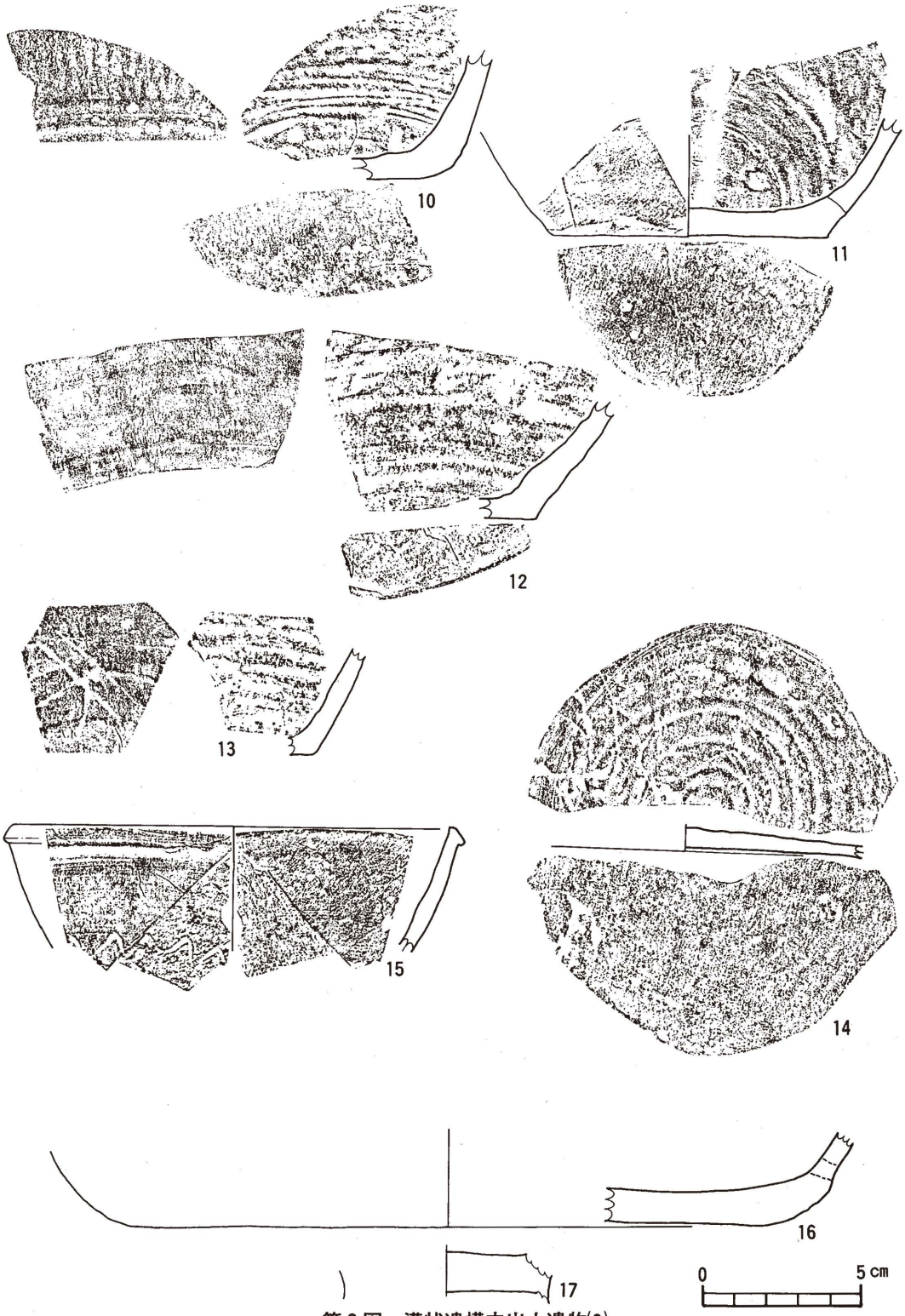
26～28は平底を呈する土器で，溝状遺構より出土した16と同様のものである。26，27は口縁部である。舌状にすぼまる短い口縁部。28は平底の底部である。



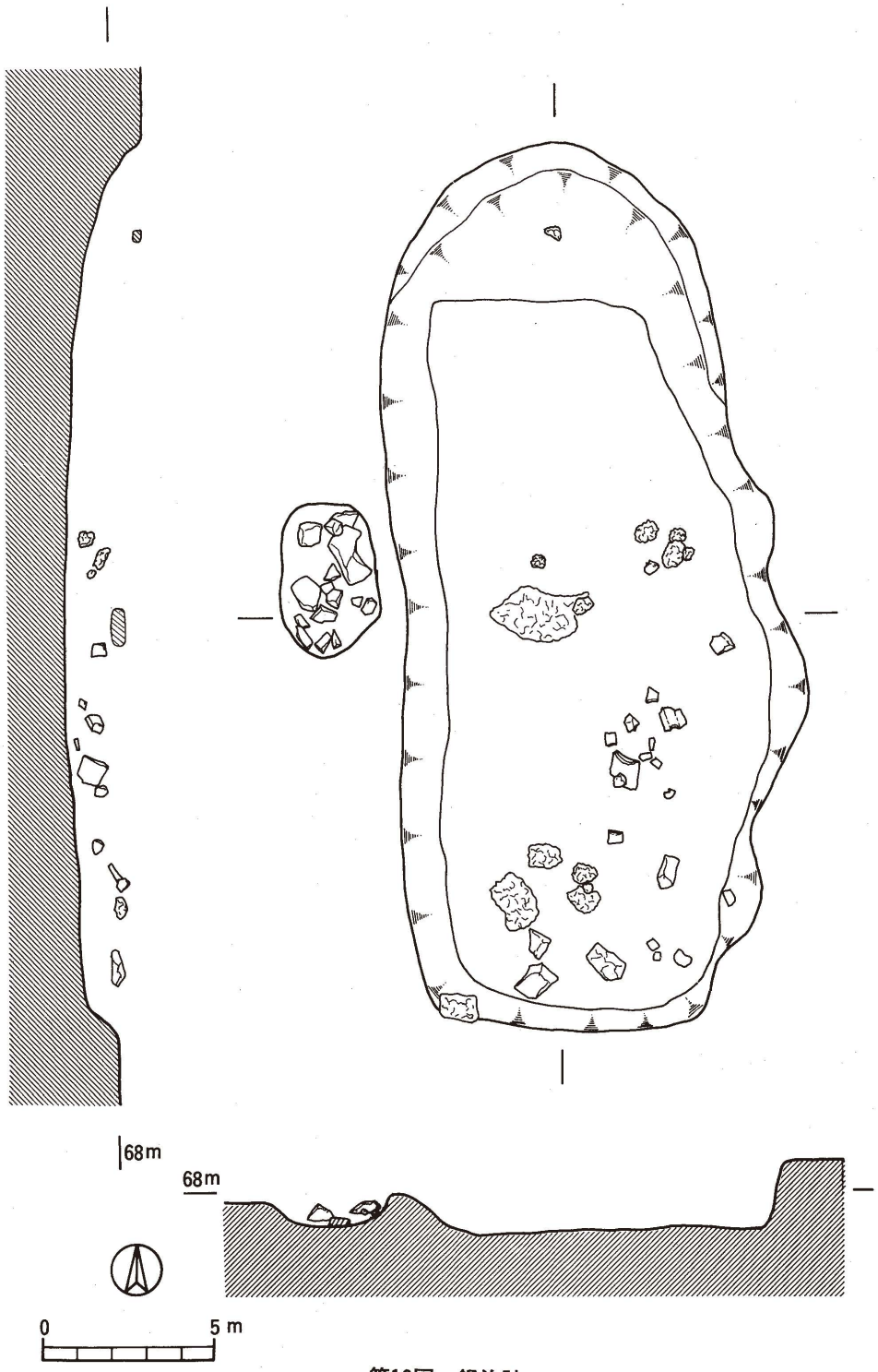
第6図　溝状遺構

第7図　溝状遺構内出土遺物(1)

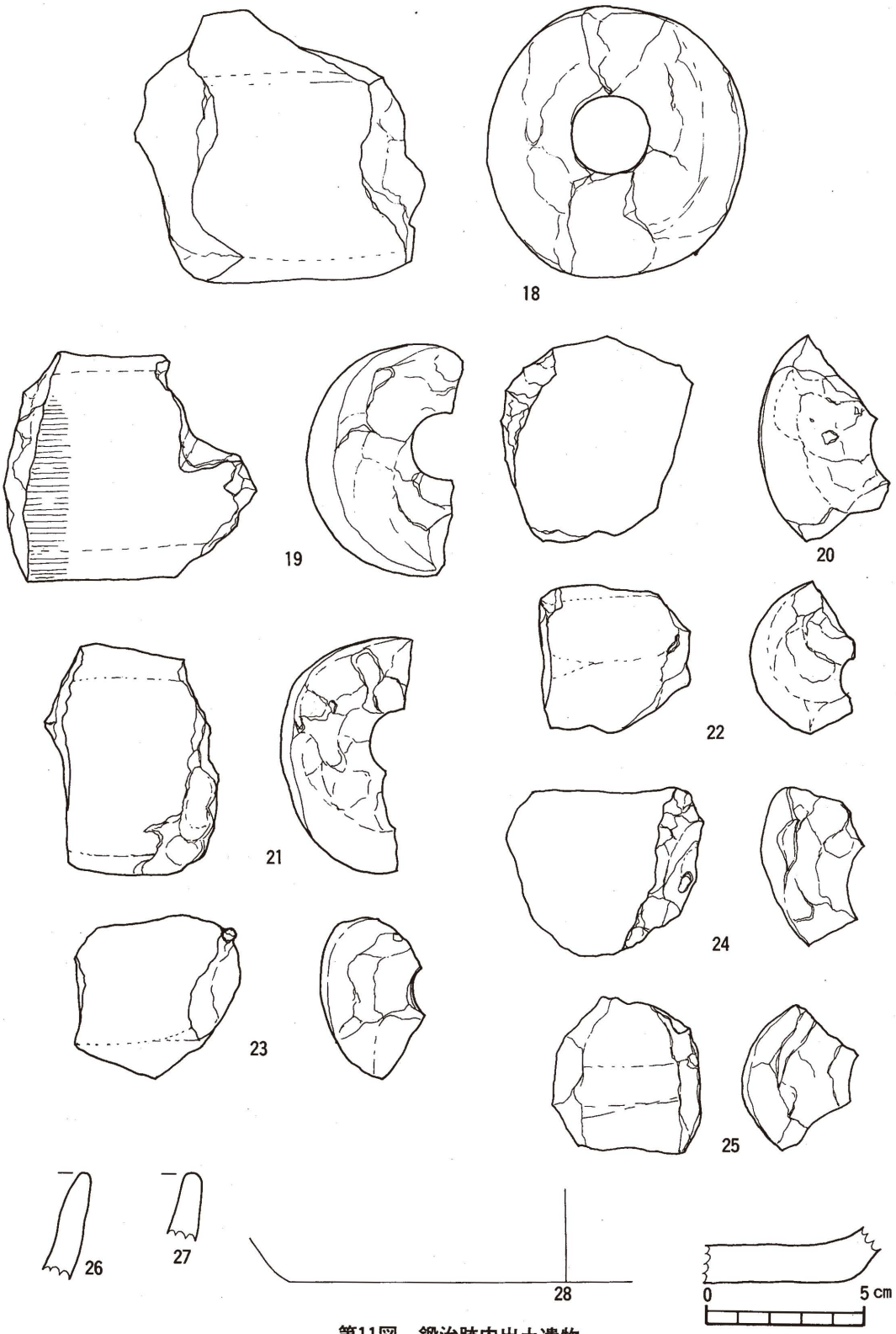
第8図　溝状遺構内出土遺物(2)



第9図　溝状遺構内出土遺物(3)



第10図　鍛冶跡



第11図　鍛冶跡内出土遺物

第Ⅴ章　遺　　物

遺物は表土層から出土したものである。

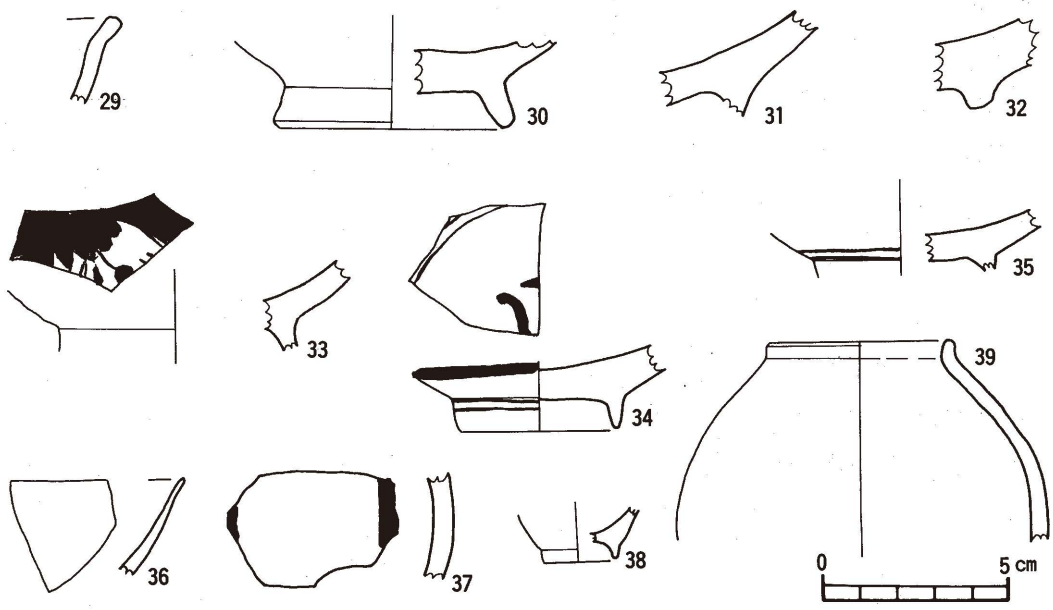
29～32は青磁碗である。29は外反する碗口縁部で，青灰色を呈し内外面とも粗い貫入が入る。30は高い高台が付く碗で，高台際はへらによりそぎ落され畳付部には釉はかからない。31は内外面とも粗い貫入が入り焼成は甘い。高台内は無釉である。32は低い高台をもつ碗である。

33～35は染付である。33は内面見込みに花文をあしらい，高台内には圏線とその内側に文様を描くが小片のため不明である。34も内外面に文様を描くが不明である。35は高台際に２条の圏線を描く。

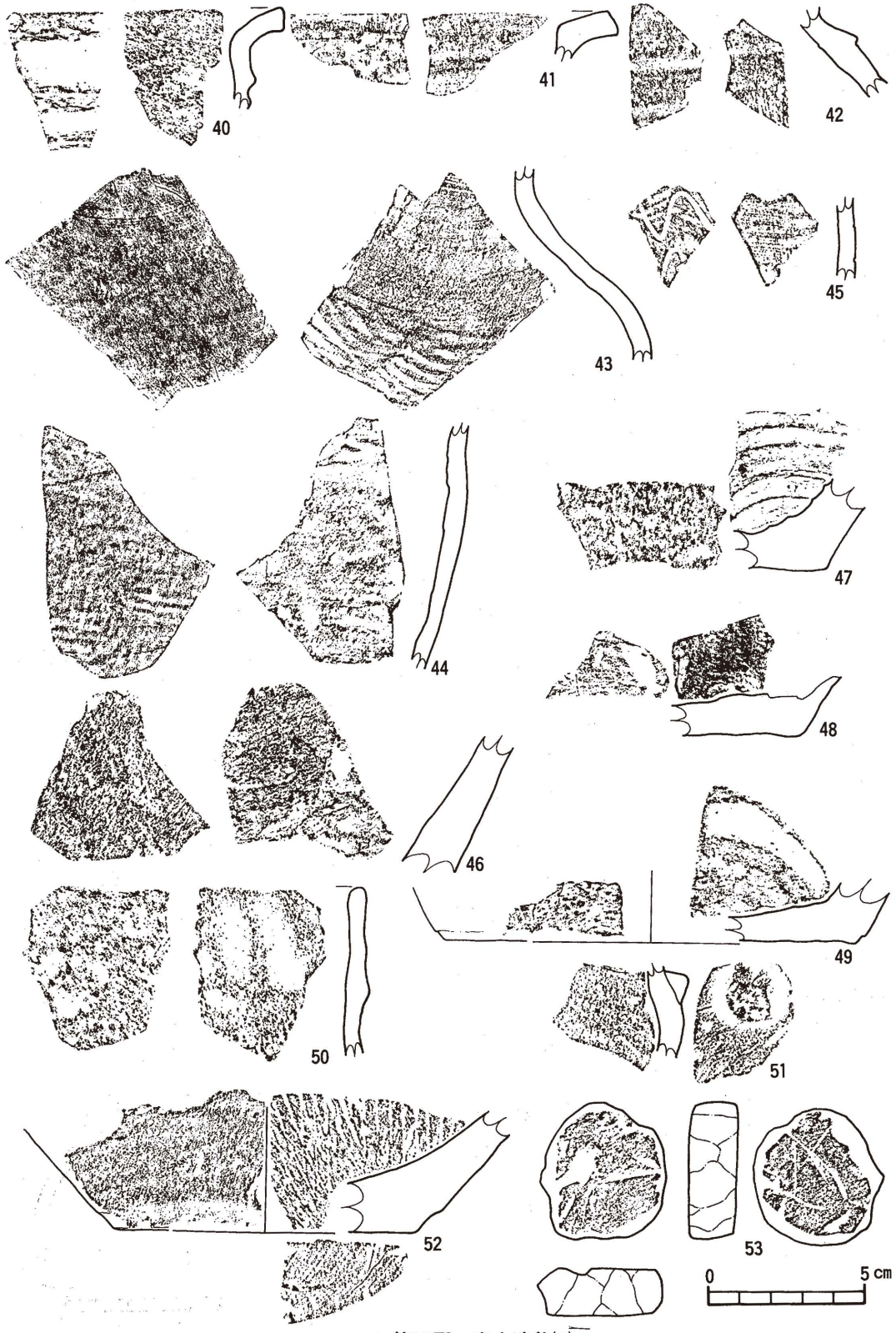
36は外面は青色，内面が灰色を呈し内外面とも粗い貫入をみる。薄手に仕上げた碗である。37は，いわゆる「ルリコン茶家」で，沈線の内外にルリ色で仕上げる。内外面とも粗い貫入が入る。38，39は薩摩焼の猪口及び茶家である。

40～50は類須恵器である。40は甕の口径部で，口縁部を逆Ｌ字形に外反させ口唇部をやや幅広く，しかも平坦とする。口縁下部には２条の突帯を作り出している。41も甕口縁部である。43，44は肩部である。43は肩の張らない壺形土器で内面胴部以下は平行タタキ目，肩部以上及び外面はロクロによるナデ仕上げである。46～49は底部である。50は素焼きの口縁部である。53は径4.2cm，厚さ1.5cmを測るもので，土器の表面を平らに磨き，周縁も面取りして円盤状に仕上げている。灰色を呈する。

51，52は薩摩焼の茶家及びすり鉢である。



第12図　出土遺物(1)



第13図　出土遺物(2)

第Ⅵ章　まとめにかえて

今回の発掘調査で得た資料は，溝状遺構と鍛冶跡の２遺構と，両遺構の埋土中に出土した土器や羽口，各トレンチから出土した青磁，染付や近世陶器等の遺物であった。

溝状遺構は緩傾斜する台地の高所と低所を結ぶ略東西に延び，Ⅲ層に掘り込まれたものであった。西側は圃場整備のためすでに削平されており全体の形状を知ることができない。

埋土中には図示したように類須恵器と盤状の土器が出土した。類須恵器については，かつて白木原和美氏によって集成され「類須恵器」との名称を用いられた。(1)

また，河口貞徳氏は早くから，しかも勢力的に南島の諸遺跡の発掘を手がけ，多くの成果を発表されてきたが，類須恵器については，喜界町から出土した類須恵器が滑石製石鍋と共伴することに注目され，時代の概要を指摘された。

その後，大島郡伊仙町阿三カムィヤキにおいて義憲和，四本延宏氏により窯跡を発見，(2)ついで昭和59年10～11月の発掘調査に至り，類須恵器の生産地の特定に至った。(3)発掘調査報告によれば磁気測定法で11～13世紀，C^{14}法では12～13世紀の年代が得られ，ここに類須恵器の実年代が提示されたのである。本溝状遺構内出土の類須恵器も，波状文を施す施文法や玉縁を有する埦等カムィヤキ古窯出土の類須恵器と同様の資料が得られたことから，12，13世紀代の溝状遺構の可能性もあろう。なおまた，溝内より出土した盤状の土器は器形や胎土に多くの金雲母を混入させ，あたかも滑石製ないしは滑石混入土器に似せる意図がうかがわれるもので注目される土器である。

沖縄で出土する滑石混入土器に器形や製作法も酷似しており，今後これらの土器との関連が注目される。(4)鍛冶跡は，浅い土坑を鍛冶場としたもので，坑内には羽口，鉄滓が出土した。また坑内には溝状遺構中から出土した金雲母混入土器と同種の土器が出土していることから，同一年代と考えられよう。奄美諸島における中世代の羽口の出土は，この期における南島の鉄製品生産はもとより，製品の種類や流通関係等経済史解明にも寄与するものと思われる。

以上，今回の発掘調査で得た資料でいくつかの問題点を列記したが，資料的に少なく体系的な論稿には至らなかった。これ等の点については今後の資料の増加を俟って検討したい。

〈参考文献〉

1．白木原和美「類須恵器の出自について」『法文論叢』第36号熊本大学法文学会　1975

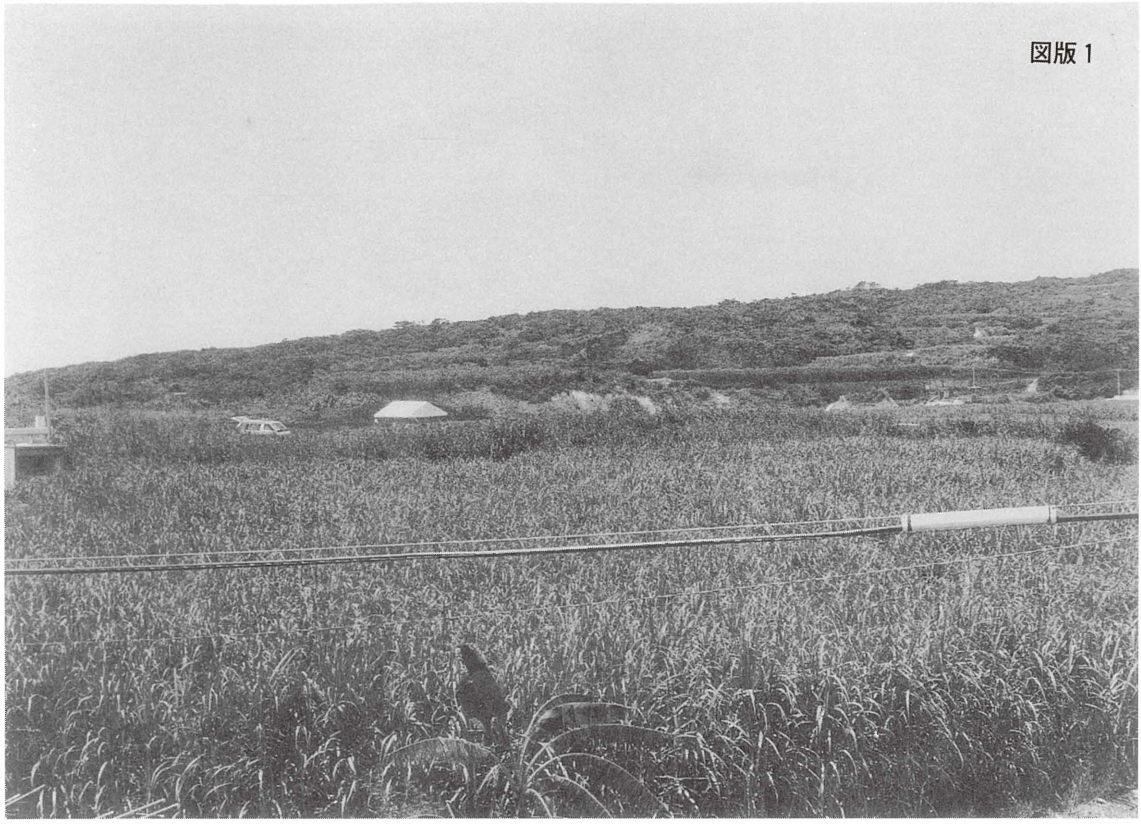
2．義憲和・四本延宏「亀焼古窯」『鹿児島考古』第18号　1984

3．新東晃一・青崎和憲他「カムィヤキ古窯跡群Ⅰ」伊仙町埋蔵文化財報告書(1)　1985

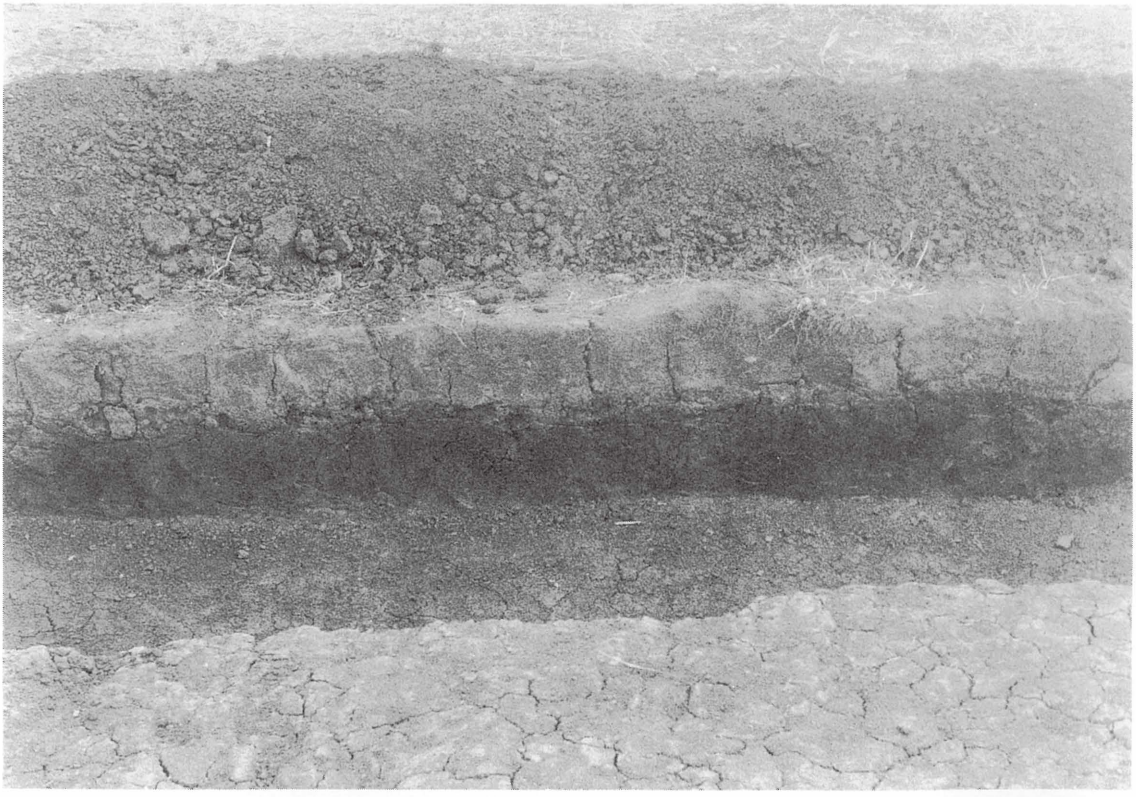
〃　「　〃　Ⅱ」　〃　(2)　1985

4．安里嗣淳・島　弘「伊良波東遺跡」豊見城村文化財報告書２集　1987他

図　　版

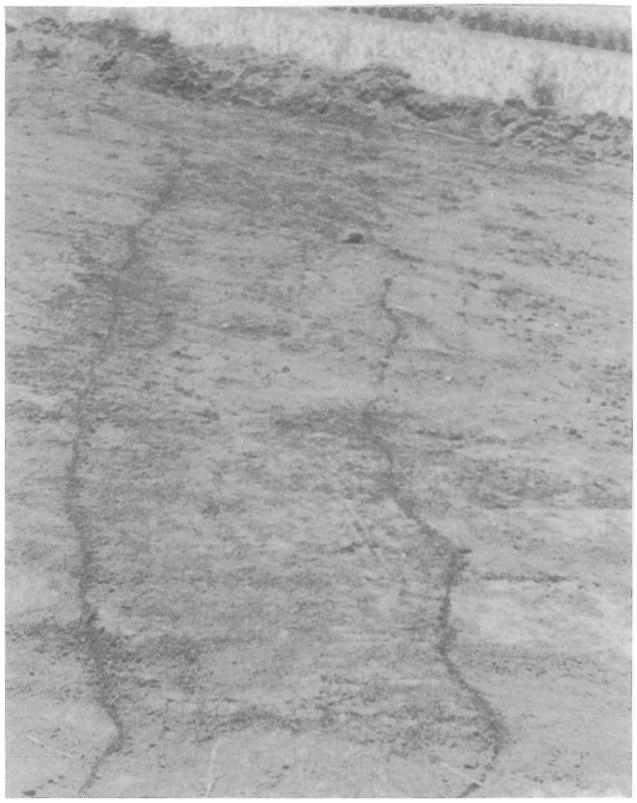


遺跡近景



土層

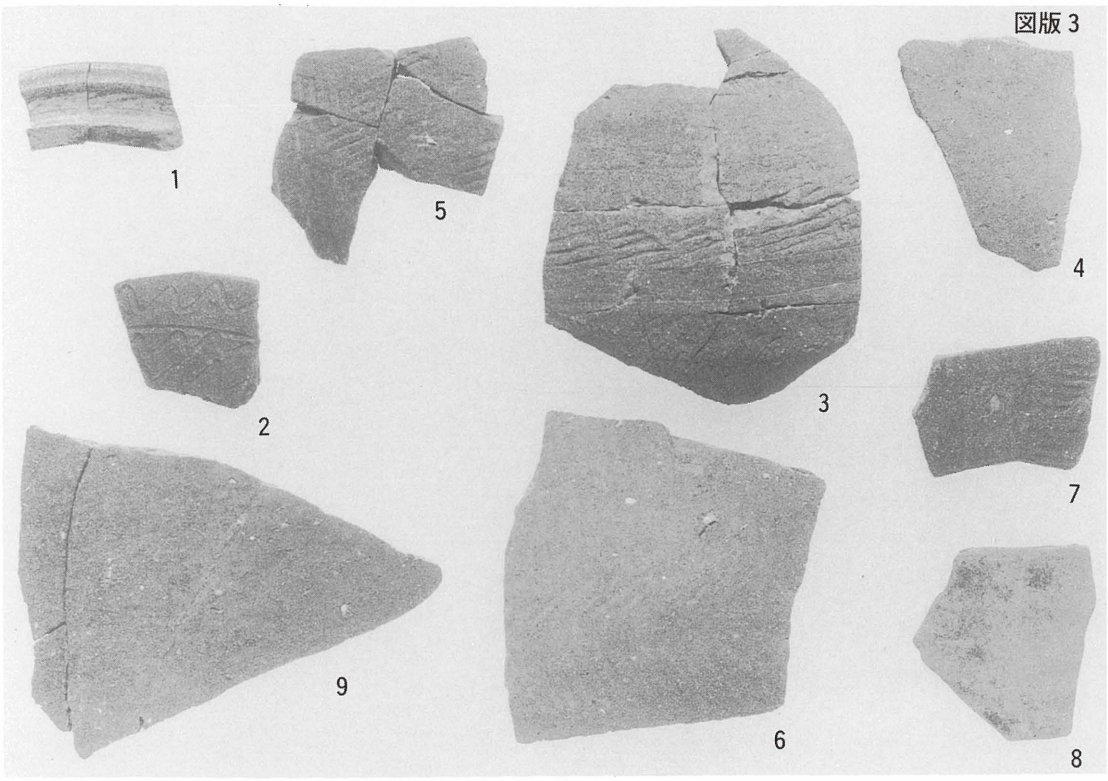
図版 2

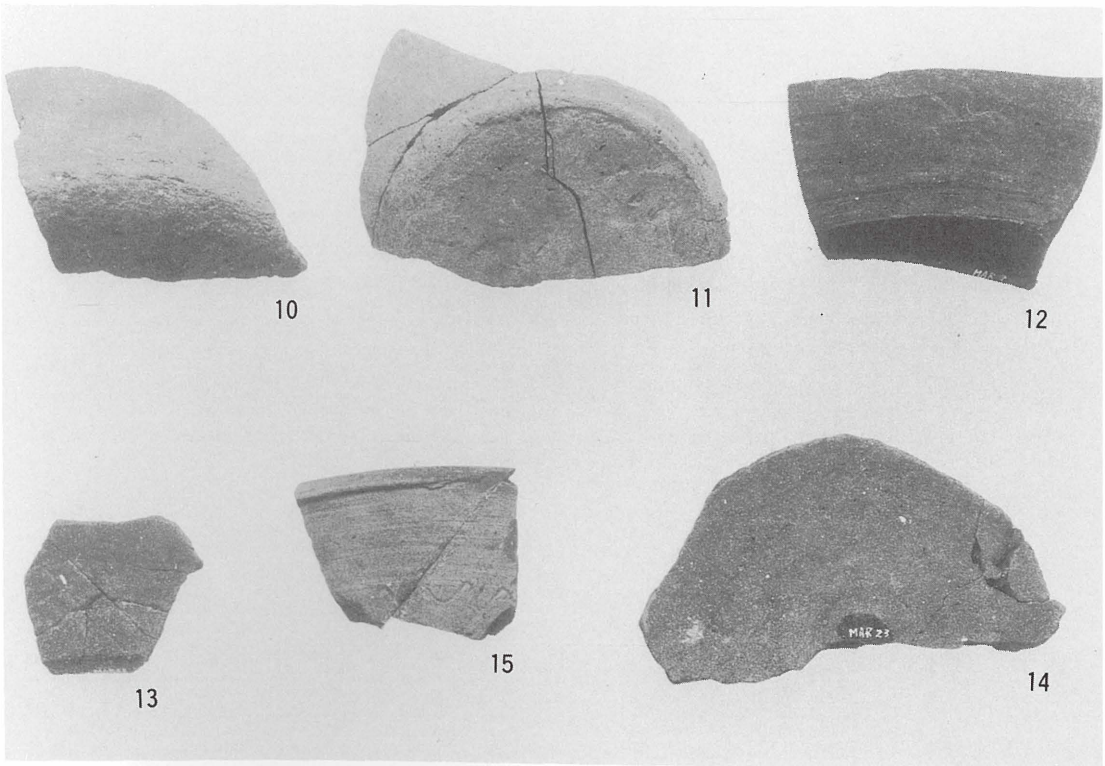


溝状遺構

検出面

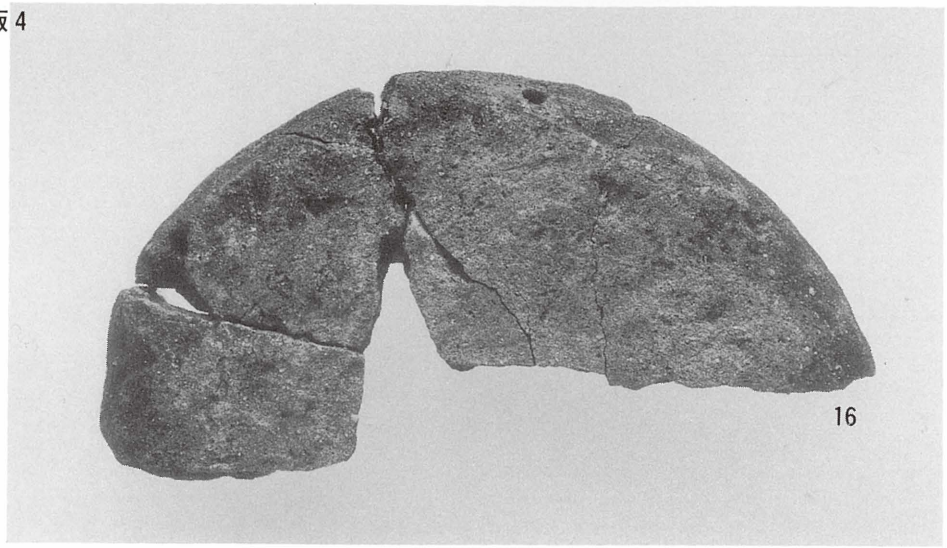
検出後



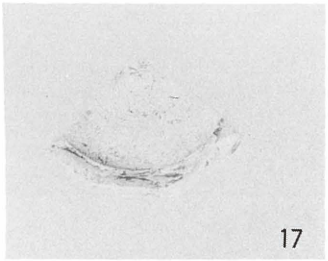


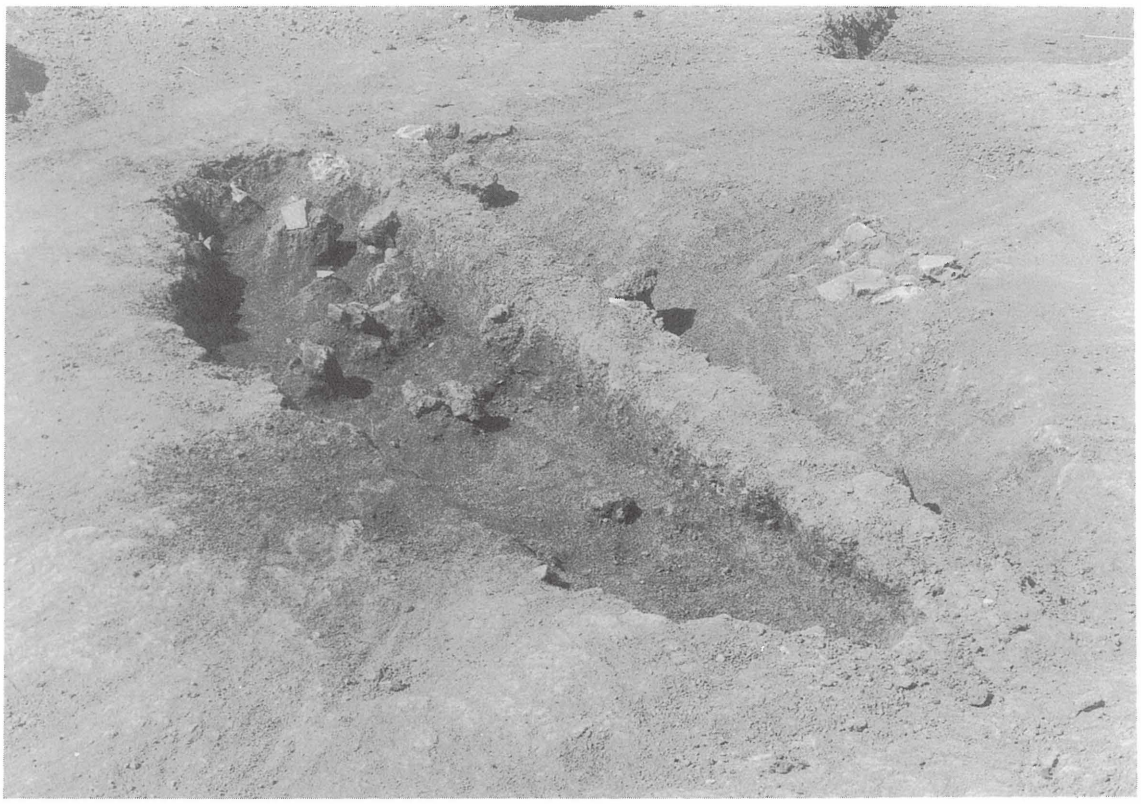
溝状遺構内出土遺物

図版 4

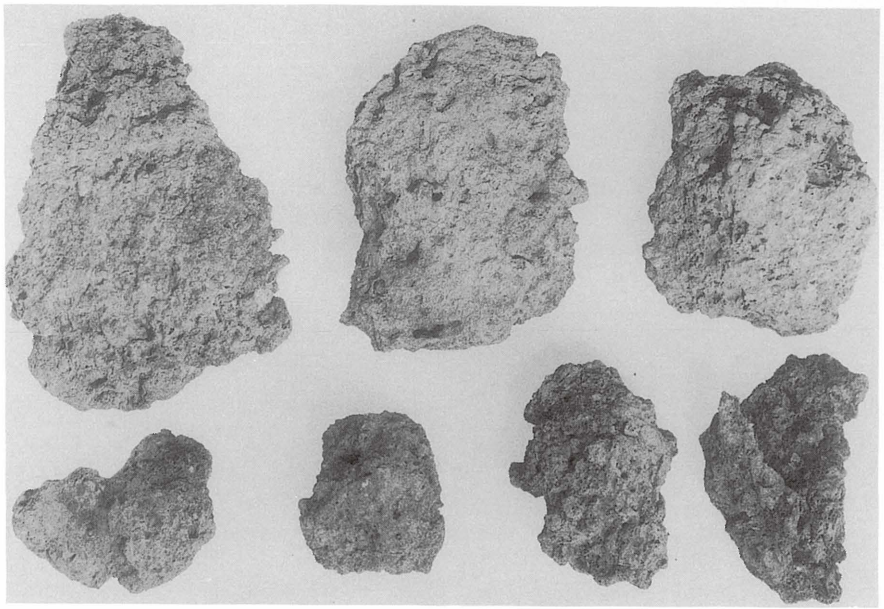


溝状遺構内出土遺物

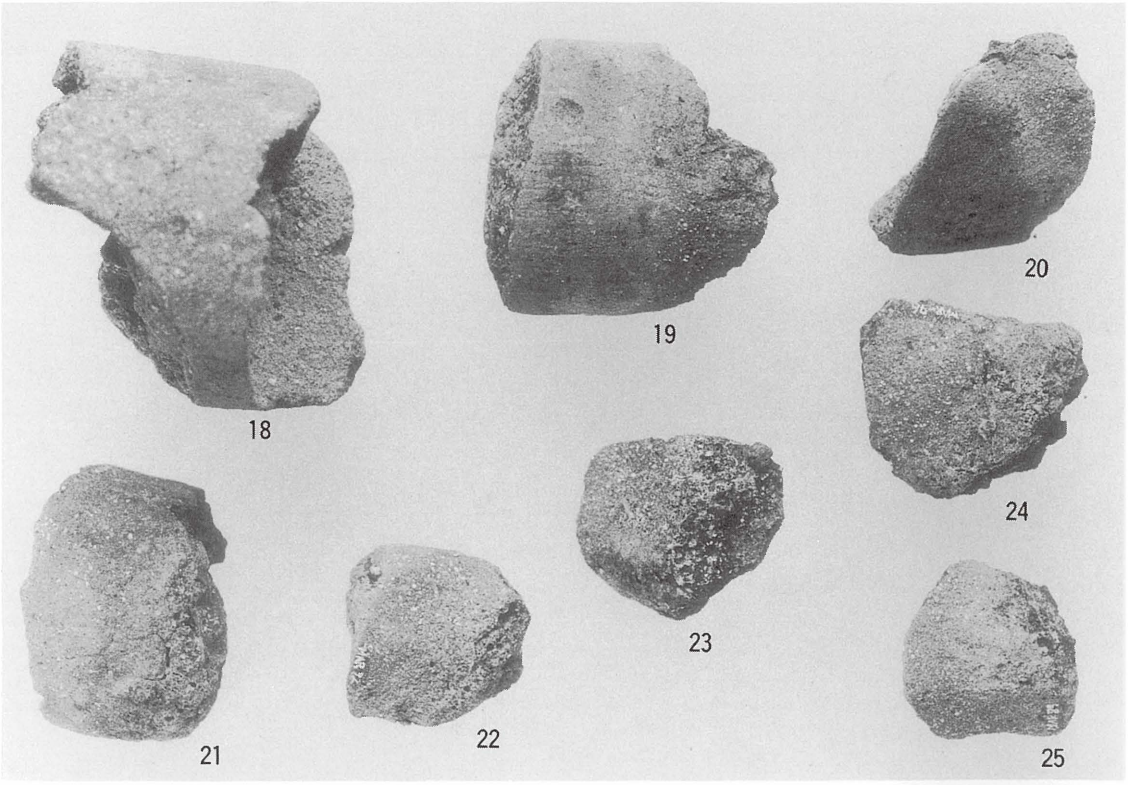




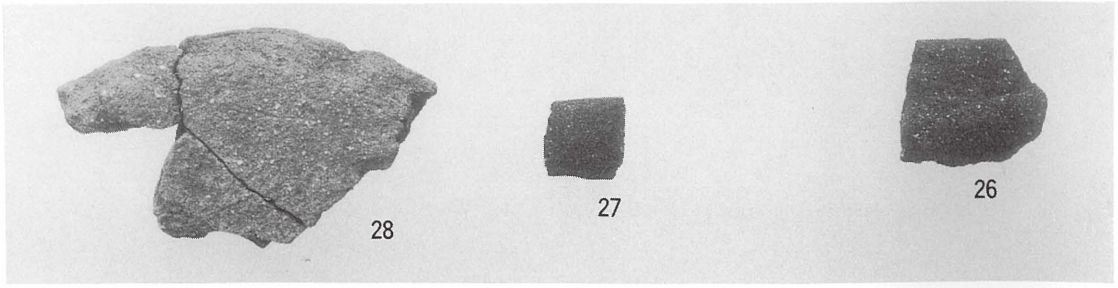
鍛冶跡発掘状況



鉄　滓



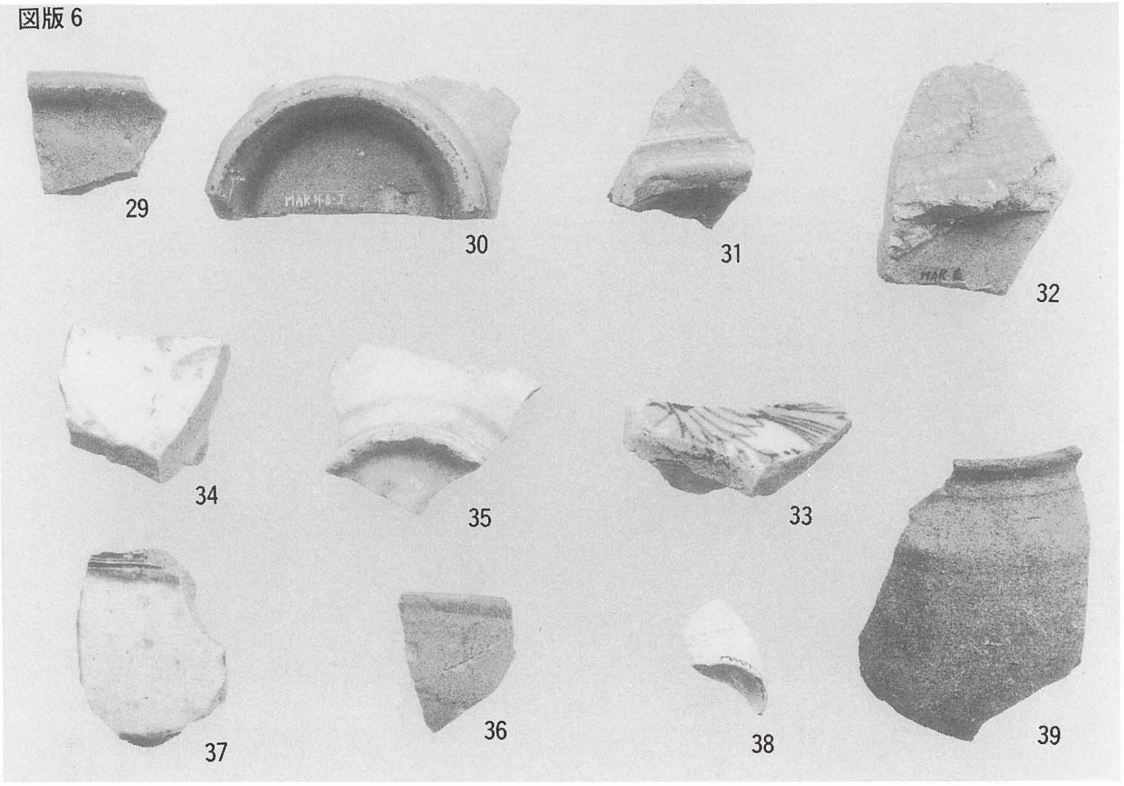
羽　口

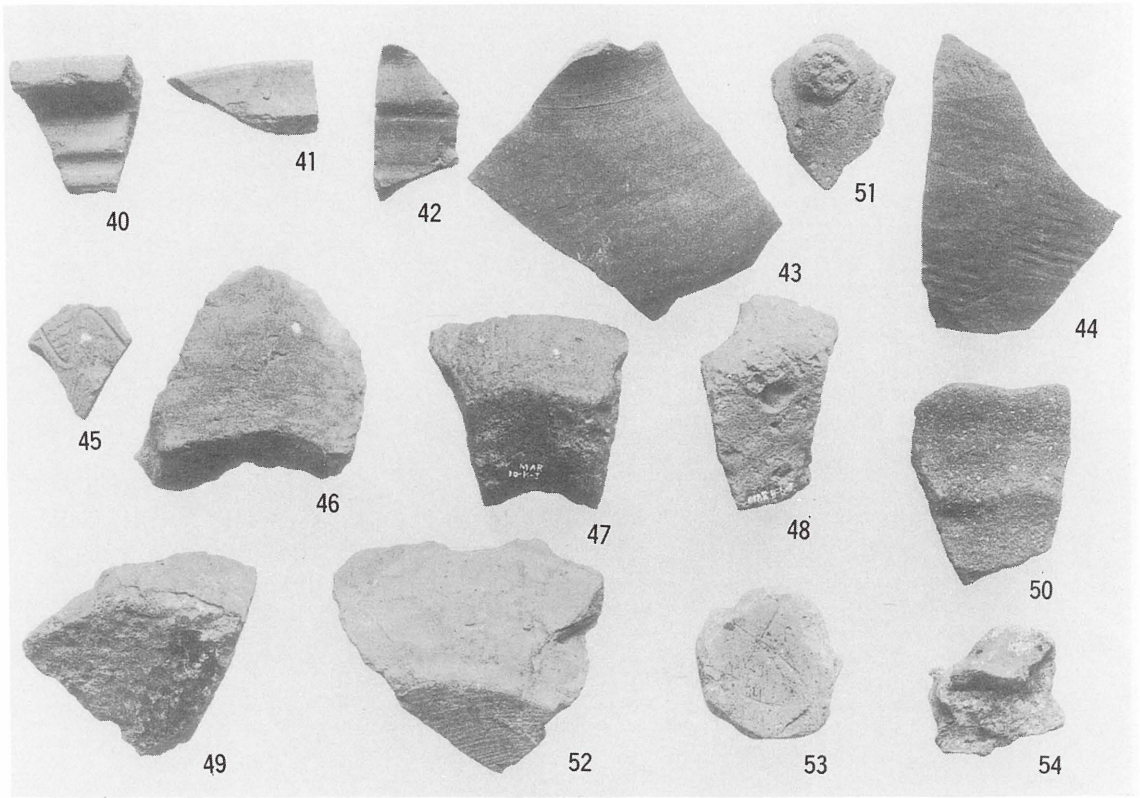


土　器

鍛冶跡内出土遺物

図版 6


29
30
31
32
34
35
33
37
36
38
39


40
41
42
43
51
44
45
46
47
48
50
49
52
53
54

発掘風景

あ と が き

盛夏の１週間であった。

照りつける日差しのもとでの発掘は容易ではなかったが，作業に従事してくださった方々の努力で，短期間のわりには大きな成果を得ることができた。

また，準備，発掘中にわたって，県沖永良部土地改良出張所，町経済課等関係各機関の協力があって，調査はスムーズに進行した。

改めてお礼をのべてあとがきとします。

発掘作業員

坂元　乙代	中原　重子	山川　シズ
泉村　せい	前島　ハル	森田　ミヨ
吉田　マツ	森田　ツル	三昌　松枝
三原さとみ	山下　俊子	大山喜代美

整理作業員

高瀬　孝子

知名町埋蔵文化財調査報告書 (6)

前　当　遺　跡

発行日　昭和63年３月
発行者　知名町教育委員会
印刷所　有限会社 朝日印刷